

二年間における同一学級集団の 変容に関する一考察

高 橋 宗

問 題

本研究の目的は、同一学級集団における二年間の行動変容を、ソシオメトリックや性格特性と関係づけて検討することである。学級集団を考える場合、教育現場における「ある時点での状況」としてとらえてしまいやすい。したがって高橋(1988)は、ある集団における問題を分析する方法として、友人の選択傾向を性格特性と関係づけて検討している。しかし本来、学級集団を考える場合、いろいろな条件を考えなければならない。特に学級集団が時間経過とともに、どのように変容するかを検討は、重要な問題であるのに比較的されていない。それは、時間とともに変化する学級集団を、どのようにとらえるかといったデータ収集上の問題が存在しているからでもある。しかし学級集団そのものは、時間とともに形成され変化していくものである。その変化の過程に、どのような要因が働いているのかを検討することが、学級集団の研究にとって欠くことの出来ない問題といえる。たとえば、小学校における教育現場では学級編成を行なうと、原則として2年間はそのまま同一学級として継続されている。したがって担任の教師も、ほぼ同様に2年間その集団の中で過ごす場合が多い。しかし、現実場面では、必ずしもそのような原則にもとづかない場合も生じてくる。すなわち、学級編成上のメンバーは変化していなくても、担任の教師が1年後に変わる場合がしばしば生じる。その場合、担任の変更によって、学級運営の方針が変化することは十分に考えられる。その為はその学級の集団構造が変化したり、子ども達の行動様式が大きく変わってしまったりする事が考えられる。しかし、そのような学級集団に与える影響についての

(2)

研究はほとんど見られない。もちろん、2年ごとに学級編成が行なわれる場合にも、当然、同様の現象が生じていると思われる。その場合は、学級集団全体が組み換えられる条件である為に、教師の変更と同様に学級メンバーの変更でもある。したがって、それは新しい集団形成の始まりと見ることが出来よう。このように学級集団は、担任である教師の指導性のもとに集団が形成されていくものと考えることが出来る。したがって、そこには教師の学級に対する指導性が問題にされる。たとえば、吉崎(1978)は教師のリーダーシップ行動と学級勢力構造の関係を検討している。それによると、リーダーシップの強い教師のもとには、集中化構造の学級が多く、弱いリーダーシップの教師のもとには、分散化構造の学級が有意に多かったことを明らかにしている。さらに、児童の規律遵守度も、リーダーシップの強い教師のもとでより高かったと述べている。このような教師の指導性が、学級に及ぼす影響について研究したものとしては、三隅・矢守(1989)、松原(1985)、西山(1982)、佐藤・篠原(1976)など多く見られる。

このように、教師がその学級集団の形成に大きな指導性をもっていることを考えるならば、途中で担任が変更になるといった条件は、当然、その学級に大きな影響を与えるであろう。なぜなら、ある方向に形成されていた集団が、全く別の教師によって他の方向に形成されことになるからである。もちろん、教師はその集団をより良い方向にもって行くことを考えているのではあるが、その集団を構成している児童にとっては、同じものとして受けとめることが出来ないであろう。それは前者と後者の教師間にアンビバレントなものを児童に感じさせるであろうし、すぐに後任者の教師に従うことの出来ない心理的なわだかまりも生じてくる可能性をもっている。そのような要因が複雑にからみ合えば、学級集団内に混乱を生じ、必然的に分散的な構造になってしまうであろう。

本研究の対象になった学級集団も、編成後1年目で担任が変更するといった条件の事例である。そこで、担任の変更が同一集団に対しどのような影響を与えるかを明らかにする為に、本研究の分析が行なわれた。

方 法

被験者：大津市立の公立小学校5年生の児童42名（男子、女子、それぞれ21名）を、2年間（5年生と6年生）用いた。

手続：まず学級の児童に、ソシオメトリックテストを実施した。席がえをする時の友人選択という基準を用い5名制限法でおこなった。但し、該当者のない場合には無理に書く必要のないことを了解させた。友人選択については、全員がほぼ記載していたが、排斥においては、「いない」といった理由で書かれていない場合があり、各個人のデータにばらつきが見られた。調査は、5年生時には2学期終了前の12月。6年生時には1学期終了前の7月と2学期終了前の12月の2回実施された。どちらの場合も、学級編成後3ヶ月以上を経ている。

次に、学級の児童がどのような性格をもち、その学級に対して、どのような行動傾向をもっているかを見る為に、日句式問題行動予測診断検査(P・S・T)を実施した。P・S・Tは5～6年生用を用いた。児童1人1人が、各項目を読み、それに従って全項目について評定した。この検査は、5年生時の10月と6年生時の12月の2回実施され比較検討された。分析に関しては、この検査によって明らかにされた反社会的行動傾向、非社会的行動傾向、性格特性、児童の態度や悩みなどの項別に評価点を出し、それを分析データとして用いた。

結果および考察

1. 学級の集団特性

同一学級が2年間の間にどのように変化するかを検討する為に、ソシオメトリックで得られた被選択数及び社会的地位指数を比較したのが、表1～3である。この結果から判るように、5年生時から6年生時に移るに従って、学級内部が分化しているのが判る。5年生時の2学期末頃には、人気者は5名で孤立児が1名である。ところが、6年生時の1学期末では、人気者は2人に減少し、周辺人1人と孤立児1人となっている。特に女子で

は、5年生時では4名もいたのが、6年生時になると誰もいない状態に変化している。さらに、6年生時の2学期末になると、さらに大きな変化を示している。人気者は急に16名と増加し、それに合わせるように学級集団内も細分化しており、5つのグループに分かれている。これは1年前の5年生時が、男女の2グループであったのに比べて大きな変化と言える。この状況を、狩野(1979, 1985)が示したソシオメトリック・コンデンスエイションに基づいて学級構造を図示したのが、図1である。これでも明ら

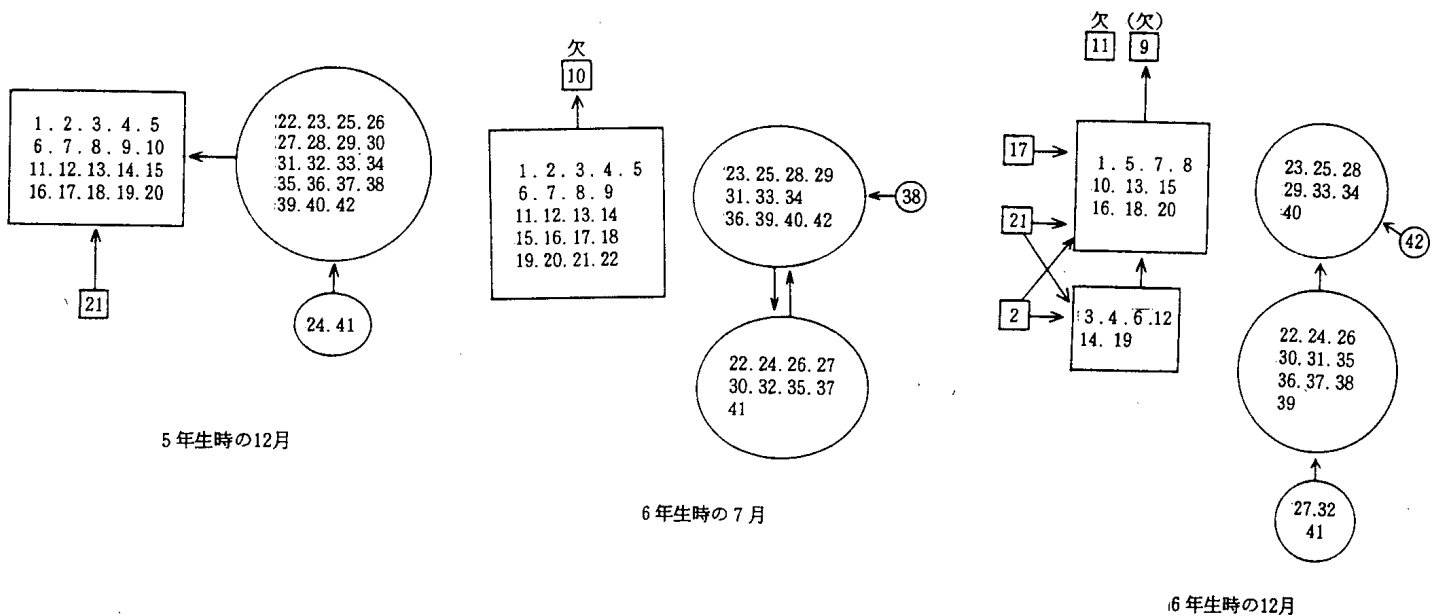


図1 同一学級における3回のソシオメトリック・コンデンスエイション比較
(四角は男子・丸は女子)

かなように、まず、男子と女子が大きく分極化している。その状態から6年生時の7月時点では、女子内部でさらに2分極化する現象が見られ、続いて12月には男子も分極化している。このような細分化構造の現象が起こるのは、この学級内になんらかの変化があったからではないかと考えられる。そこで、構造変化をくわしく検討する為に分析方法を変えてみた。すなわち、構造マトリックス分析を「選択肢が全くなくなるまで」といった無制限法から、第1選択肢による反応だけの方法に変えて分析を行なった。

(8)

そして、それにもとづいて、ソシオメトリック・コンデンスエイションを描いたのが図2である。これは5年生の12月時と6年生の12月時の比較で

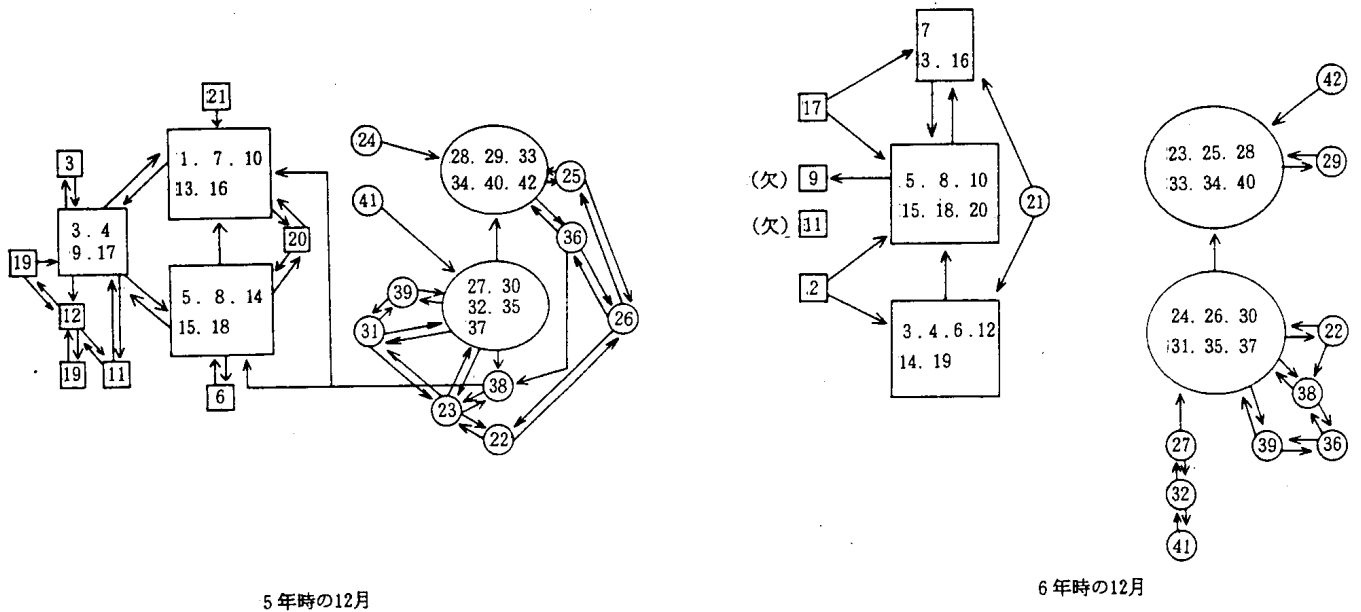


図2 第1選択肢のみおける5年時と6年時のソシオメトリック・コンデンスエイションの比較
(四角は男子・丸は女子)

ある。これによると、図1でみてきたコンデンスエイションとは少し異なっていることが判る。すなわち、無制限法にもとづく分析結果では、男女の二分極に集約されるが、第1選択のみによる分析結果では、男子は3つに、女子は2つに大きく分極しており、5年生時と6年生時のどちらもよく似た分団構造を示している。この結果から考えると、この学級では、もともと男女1つづつにまとまった集中構造ではなく、男女ともそれぞれ2つ以上の分団に始めから分かれていたと考えることが出来る。すなわち、男子では3つの分団とそれを取りまく周辺の子どもたちによって構成されているのである。これらをさらにくわしく分析してみると、男子グループの3つの分団の中核になるメンバーが、5・6年生を通して決まっていることが判る。1つはNo. 1. 7. 13. 16によって構成されるものでAグループと名づける。2つめは、No. 5. 8. 15. 18によって構成されるものでBグループ

プと名づける。3つめは、No. 3. 4によって構成されるものでCグループと名づける。これらのメンバーは、5年生時から6年生時にかけての1年間の間、全く変化していない。ただ、5年生時においては、AグループとBグループを結びつけていたのが、No. 20であることが大きな特徴とも言える。このメンバーは、AとBの両グループになんらかの形で相互選択の関係を形成している。それによって、AとBのグループは、No. 20を通して1つのまとまりある中規模の分団として形成されており、さらには、男子が1つの集団に統合される要素となっていると見られる。それが6年生時になると、Bグループの集団に加わってしまうといった状況に変化している。その為に、AとBのグループは1つの分団としての機能をより強く持ったことになった。それに対して、Cグループは、他のグループほど集団内の結合が強くなく、No. 3. 4によってのみ形成されているため、6年生時では、他のグループとの間の関係が弱くなっている。すなわち、Cグループの形成には、5年生時のA, Bグループのメンバー以外の周辺人によって形成されており、分団としての凝集性の違いが現われている。その結果、図1で示した6年生時後半の姿として示されていると言える。

女子の場合にも同様のことが言える。5年生時において、大きな1つの集団を形成しているように見えるが、第1選択技法による分析では、2グループとその周辺の子ども達によって複雑なコンデンスエイションが形成されている。その1つは、No. 28. 33. 34. 40. を中心とする集団で、6年生時でもその分団の近くにいるメンバーとの入れ替えによる変動が見られるものの、5年生時と6年生時において変化がなく一定している。それに対して、No. 30. 35. 37. を中心とする集団は、5年生時から6年生時に移行するにつれて大きく変化している。つまり、その集団の周囲にいて活発な相互関係をたもっていたNo. 24. 31が6年生時には集団のメンバーとなり変っている。そして、5年生時に入っていたメンバーであるNo. 27. 32が押し出されて周辺で小さなグループを形成している。また、これら2つのグループ相互の関係を結びつけているメンバーであったNo. 26が、一

(10)

定の集団に属した為に、6年生時には相反する状態となり、2つをつなげるパイプが消失してしまっているのが特徴である。ただ、その裏にはNo. 23の存在が大きな影響を与えている。このメンバーは、5年生時も2グループからはずされていたのであるが、No. 22を介してNo. 26と関係があった。それが、2グループをつなげる役割をになっていたが、6年生時では、この両者の間が分裂してしまったことが、2グループを分離させる原因になっていると見る事が出来る。

2. 学級の行動特性

この学級集団に対して、5年生時と6年生時に問題行動予測診断検査が実施されたが、その結果の社会的行動傾向と非社会的行動傾向の出現率は表4.5の通りである。これによると、反社会的行動傾向としての反抗や

表4 反社会的行動傾向の出現率

項目	6年生			5年生		
	高い	中	低い	高い	中	低い
反抗・攻撃・破壊・家出	21	40	38	12	36	52
自己顕示・注目喚起	19	52	29	9	40	50
うそつき・万引・怠け	28	36	36	14	14	57

(%)

表5 非社会的行動傾向の出現率

項目	6年生			5年生		
	高い	中	低い	高い	中	低い
登校拒否・対人関係拒否	15	40	45	14	29	57
不安・恐怖・ノイローゼ	10	38	52	17	36	48
劣等感・自己嫌悪	22	40	38	19	26	55

(%)

攻撃性は、5年生時に比べて6年生時の方が2倍近く増加している。同様に、自己顕示や注目されたいといった行動傾向も6年生時にはっきりと増加していることがうかがえる。すなわち、この学級集団内の児童が、明らかに目立つような行動を意識しており、エネルギーが外に向けて発散されていることを示している。このことは、表5で示されているような、登校拒否や不安、恐怖心といったネガティブな行動傾向が6年生時になってもほとんど増加せず、逆に不安や恐怖心は減少する傾向がみられることからみても裏づけられる。このような結果から判断すると、表面的には5年生時は比較のおちついた静かなクラス状況と判断することが出来る。それに対し、担任が変更した6年生時になると、急に活発で自己主張が多くなるといった行動傾向が強く見られ出している。

このことは、現場の事実としてもとらえられている。すなわち、担任の変更前の5年生時のクラスは、比較のおちついたクラスとみられていたが、変更後は、クラスの一部の児童が授業中にさわいだり、勝手な行動をとって学級集団内を混乱の状態にしている。この原因を考える場合、1つには、5年生時の担任が男子の教師であり、変更後の6年生時の担任が女子の教師であった事によるかもしれない。事実、この学級の編成が行なわれたのは5年生の4月である。この時点で個性の強い児童が集まった学級として、まとめるのに担任が苦勞している。しかし、2学期末には図1にみられるように、担任に従う1つのまとまりのある学級として形成されている。しかし、その反面で、担任以外の教師の授業（たとえば、音楽の女教師の場合）では、教師の言葉に従がわなかったり、さわぐといった問題行動をしばしば起こしていた。ところが、1年後の4月から、担任も女教師に変更になった事から、そのような問題行動がクラス内でもしだいに見られ出した。しかしそれは、担任による学級指導方針の違いによって生じて来たと考えることが正しいかもしれない。なぜなら、図1に示された結果でも判るように、5年生時の12月と6年生時の7月では余り変化していないが、2学期末の12月には明確な変化を示すといった学級変動によって理解でき

るであろう。さらには、この学級変動を、前述した第1選択肢による分析において検討するなら、5年生時も6年生時もほとんど変わっていないといった事実を発見することが出来るからである。すなわち、このクラスの分団構造は、学級編成時からほぼ存在していたと見るべきである。この事実にもとづくなら、6年生時の変動は担任によって抑制されていた行動エネルギーが、担任変更といった要因によってポジティブな形態で示され出したと考えることが出来る。とくに、男子児童においてその傾向が顕著にみられている。たとえば、図2で示されるBグループの集団がその中心であった。ただ、その要因は、この学級が編成された時点より内部的に存在していたが、表出されていなかった。それが担任変更という要因によって表出されたとも言える。なぜなら、5年生時には教師の力が大きかったのか、ソシオメトリックとしては学級全体がまとまった状況を示している。しかし、そのまとまりに反して児童の心中には不安や恐怖の感情が高く示されている(表5)ことも明らかである。また、児童の悩み(表6)で、能力がない、相談したい事がある、集中できないといったような病的因子の増大が目立っており、児童のエネルギーが発散されずに集団内に抑制され出していることを示している。もし、このような状況が長く続けば、当然、個々の児童の中に内面的な問題としての問題行動を発生するにいたる可能性をもっていたと見る事が出来る。事実、登校拒否のような行動を示す児童が現われ出していたのである。しかし、このような場合、それが問題にされるのは個々の児童自身であり、学級全体や教師の問題とはされにくいのである。ましてや、図1で示されるように、学級全体として1つにまとめられた形態を示している場合、学級運営としての評価は高くなり、問題の本質は見えなくなる場合が多い。そこに、今日の学校における学級集団の問題が存在しているとも言える。すなわち、教師の接し方が児童を1つにまとめるといった方向に力が注がれることによって、学級運営が管理的方法となり、学級集団の心的エネルギーを内面的にどよませることになるといった問題を含んでいるからである。

表6 児童の悩み・不満の傾向における出現率

項目	6年生			5年生		
	高 い	やや 高い	低 い	高 い	やや 高い	低 い
学校へ登校したくない	2	7	90	5	10	86
友人関係の悩み	10	10	81	5	7	88
親への反応・不満怠け	0	24	76	2	12	86
教師への反応・不満	10	10	81	2	12	86
誰も信用できない	2	12	86	0	14	86
勉強がわからない	0	10	90	2	7	90
進路がわからない	0	19	81	0	7	93
自分をわかってくれない	0	10	90	2	10	88
能力に自信がない	0	19	81	7	12	81
相談したいことがある	2	12	86	7	14	79
自分の容姿がきらい	2	17	81	2	21	76
身体のことの悩み	0	5	95	0	17	83
正しいことが通らない	0	19	81	0	10	90
友達がいない	5	12	83	2	14	83
注意の集中ができない	2	21	76	7	2	90
家から離れたたい	0	14	86	2	7	90
悪へきに悩んでいる	0	10	90	0	24	76

出現率 (%)

この学級の場合、1年後に全く異なるタイプの教師が担任になることによって、その管理方法が解かれた形式になったと見ることが出来る。その為に、児童が本来もっていたエネルギーが、反動のように発散されることになったと言える。それによって学級全体は活発になり、さらにはそれをこえて、落ち着きがなくまとまりのない状況にまで変形している。そのことは、教師に対する不満や反抗といった現象として現われ出している(表6)。またこの時期は、6年生時の2学期末であり、思春期のはしりと受験(中学校への)などといった要因が、そのような行動を増幅させる事にも

(14)

なったとも考えられる。その中心的な問題行動を示したのが、図2におけるBグループのNo. 8. 5でもある。このNo. 8. 5は図3に示すように、

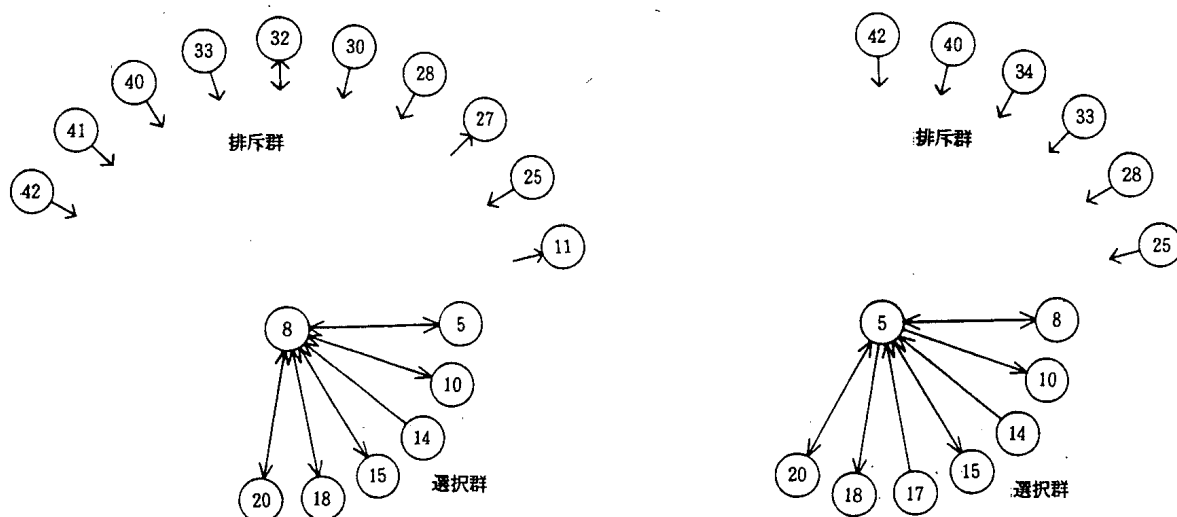


図3 NO8と5における個々の選択・排斥状況
(←の方向に選択又は排斥, ↔相互選択・排斥)

4～5名で相互選択するといった仲間集団を形成しており、その仲間を中心とする学級集団内での勝手な行動は、次第に、学級内でも孤立化していくことになる。そのことが、他の児童に比べて学級集団内でも排斥を受ける状況を多く生み出すことになっている。そして、時間経過とともに、学級全体にその児童の行動に対する問題意識が出現し、友人関係の悩み（表6）といったかたちで、心理的な不安定さを生じさせている。

このように、6年生時の学級集団での行動傾向は、5年生時に潜在化していた行動のエネルギーが発散された形態として現われており、それが、ソシオトリック上にまとまりのない結果として示されたと見るべきであろう。このような結果から一般に考えられることは、ソシオメトリックのみの結果から判断するなら、5年生時はまとまりのある集中型の学級と評価され、担任変更後の6年生時では、分団に分かれた分散型の学級として低い評価を受けやすい。そのことはまた、女教師である為にクラスがまとまらないといった誤まった評価としてももなされやすい。しかし、学級を

本当に理解する為には、担任がどのようにその学級を運営していたかを十分に検討する必要がある。もちろん、ソシオメトリックテスト上で、1つのまとまりのある学級集団として形成されることが望まれる。しかし、それは教師の力、すなわち、管理によるものではなく、学級集団員の個々の力によって形成されるべきであろう。もし、この学級が5年生時において、学級構成員の力によって1つのまとまった状況が形成されていたなら、担任変更後も余り大きな変動はみられなかったのではないだろうか。本事例の場合、潜在的に存在していた構成員の力関係が、担任の変更といった要因によって大きく左右されて示されたと言える。

今後の問題点として考えるなら、学級集団を構成している児童の性格特性と教師の性格特性、指導性などについての関係を検討することが、学級集団を十分に理解する手がかりとなりうると言える。

要 約

本研究は、同一学級集団の中で、担任の変更が学級集団の形態にどのような影響を及ぼすかを検討することである。ソシオメトリックテストを3回と問題行動予測診断検査が2回、2年間の間に実施された。主な結果は、次の通りである。

- (1) 3回実施されたソシオメトリックの結果から、担任変更後、学級集団内の構造化に変化がみられた。
- (2) しかし、その構造内容を第1選択時のみで分析すると、2年間を通して共通の傾向が見い出された。
- (3) 反社会的行動傾向が、担任変更後に多くみられ、学級集団内に動揺が現われている。それに対し、非社会的行動傾向は、減少の傾向がみられた。
- (4) 子供達の悩みとして、担任変更は陰湿的なものより陽性的な顕在化されたものに変化した。

これらの結果から、学級集団構造を明らかにする為の指標として用いた

(16)

ソシオメトリックテストの結果も、分析方法によっては、その学級の問題性を不明瞭にしてしまうことが判った。又、同一学級における担当の変更は、学級集団構造の形成に大きな変化をもたらす。そして、その結果の見方によっては、教師の指導性の問題ととらわれやすいことが考察された。

今後の課題としては、同一学級集団で教師が変更する場合、その教師間における性格特性や指導性の違いが学級集団構造に、どのような働きをするかを検討する必要がある。

文 献

- 狩野素朗 1979 集団の大局的構造特性とソシオメトリック・コンデンション エイション 九州大学教育学部紀要, 24, 2, 13—23.
- 狩野素朗 1985 コンデンション法による大局的集団構造特性の集約 実験社会心理学研究, 24, 2, 111—119.
- 松原誠司・西山 啓・野本謙司・藤田鯉栄 1984 教師の指導性に関する研究(6) —学年担任の年齢構成を中心として— 中国・四国心理学会発表論文集 17
- 松原誠司・西山 啓・野本謙司・藤田鯉栄・寺井 弦・藤原成子 1985 教師の指導性に関する研究(7) —担任教師に必要な学年別の特性を中心として— 中国・四国心理学会発表論文集 18
- 三隅不二・矢守克也 1989 中学校における学級担任のリーダーシップ行動測定尺度の作成とその妥当性に関する研究 教育心理学会 37, 46—54.
- 西山 啓・鈴木理生・山中朋子・大谷哲朗 1982 教師の指導性に関する研究(4) —「生徒が学校で重視するもの」と「望ましい教師の類型」との関係— 中国・四国心理学会発表論文集 15
- 西山 啓・鈴木理生・山中朋子・大谷哲朗 1982 教師の指導性に関する研究(3) 日本教育心理学第24回総会発表論文集
- 高橋 宗 1988 学級集団における友人選択傾向と性格特性に関する一考

察 聖泉人文・社会科学論集 1—10

横島 章 1988 学校の人間関係—人間関係の心理 3—(監) 島田一男
ブレーン出版

吉崎静夫 1978 教師リーダーシップと学級の集団勢力構造に関する研究
心理学研究, 49, 1, 22—29